(1) 水利学研究試論（討議）

東京都立大学　川口　士郎

わたくしはこの論文に対する討論を考えて2日間をついやした。それでもなお態度をきめかねてまよっている。この論文が著者のいうように「試論」であるかぎりおそらくわたくしのまよいはつづくであろう。

この論文に対する考え方には二つの方向があるとわたくしには思われる。すなわち，一つは，わかりきったこと，あるいは簡単な調査をすればわかるにちがいないことをのべたにすぎない報告と考えることである。いま一つの評価は，現在巷間おこなわれているあまりにも合理主義的な行き方に対する批判としての論文であると考えることである。

最初の評価の立場をとれば，討論はそれでおしまいになってしまうから，討論をしようと思えば，第二の立場をとらざるをえない。そこで，この立場に立って考えてみることにする。

多摩川の利水の歴史についてのべた第2ページ以降の内容については，わたくしは特別の意見をもたない。そこで，興味のある部分は第1ページの記述にかぎられる。ここで著者はこの論文の意図を説明している。それによれば，といいたいところであるが，わたくしには著者の論文作成の意図がよくわからないのである。著者は「（地方史が）政治体制ないしは政策が住民に対しどのような影響を与えたのか，また逆に住民の意志がどのような形で政治に反映されてきたのかを明らかにしている，のと相通ずる考え方に立って水をみていきたい」とのべているが，この文章がわたくしにはあいまいでよく意味がつかめない。もちろん，ひらたく読めば，ある川の流域に住む人々の意志がその川の利水と歴史的にいかに関係をもってきたかを問うのだということであろう。だったら，なぜこのような平易な書き方をしないのであろうか。問題がこのように設定されたならば，その結論については，「地域に対する知識が蓄積された段階ではじめて，一般化ないし抽象化がおこないうるのであり，かつそれがつぎの研究の必要な前奏曲となるものと考える」と著者はのべているが，ここで必要な記述は読者に対して研究プログラムの提示であろう。研究プログラムは著者のいうように知識が集積すれば変更させることはありうる。しかし研究プログラムは研究する場合必要である。

そこで，最初にのべたように，研究プログラムを立て，ある仮説を立て，論理的に結論をみちびき出す「通常の」研究に批判的な立場をとり，このような「通常の」論文でない論文をしなくてはならないとわたくしはいぶかってもいるのである。

なお第1ページの内容に対する批判として付言すれば，引用文で著者は地方史（一般）が政治と住民との関係を明確にしていると述べているが，実例をもってしめさないかぎりこのような断定はできないものとわたくしは考える。

以上.